



ICT 海外ボランティア会会報

No. 83

2018 年 10 月 1 日 (月)

URL: <https://ictov.jimdo.com> (2017 年以降の分)

<http://www.ictov.jp> (2016 年以前の分)

EML: info.ictov@network.email.ne.jp

目次

◆特別寄稿

NTT 東日本国際室の活動

NTT 東日本 IT イノベーション部
国際室長 長江 靖行氏

◆特別寄稿

徒然日記

当会特別顧問 石井 孝氏

◆JICA の動き

JICA ボランティア事業の制度変更及び 2018 年度秋募集 事務局

◆海外実践マネジメント

今も継続・拡大する Smart・PLDT プロジェクト(8)

元 PLDT チーフオペレーティングアドバイザー
元 NTT アメリカ社長
現(株)ハイホーCEO 鈴木 武人氏

◆海外グラフィティ

真藤さんのことなど
世界観の広がりとは

日本ベンチャーネット社長 エッセイスト 田上 智氏

◆海外便り

スペイン・モロッコ俳句紀行(3)

元 JICA シニア海外ボランティア 北垣 勝之氏

◆第 37 回海外情報談話会模様

事務局

NTT 東日本国際室の活動

NTT 東日本 IT イノベーション部
国際室長 長江 靖行

ICT 海外ボランティア会の皆様、NTT 東日本 国際室長の長江靖行です。この度、会報へ寄稿する機会をいただき、誠にありがとうございます。

国際室は、国内電気通信事業を担う NTT 東日本の中にあつて、あらゆる手段・手法を駆使しながら、国際ビジネス、国際協力、CSR 活動、、、と、グローバルな世界で活動を行なっています。国際活動の背景を含め、国際室の活動をご紹介します。

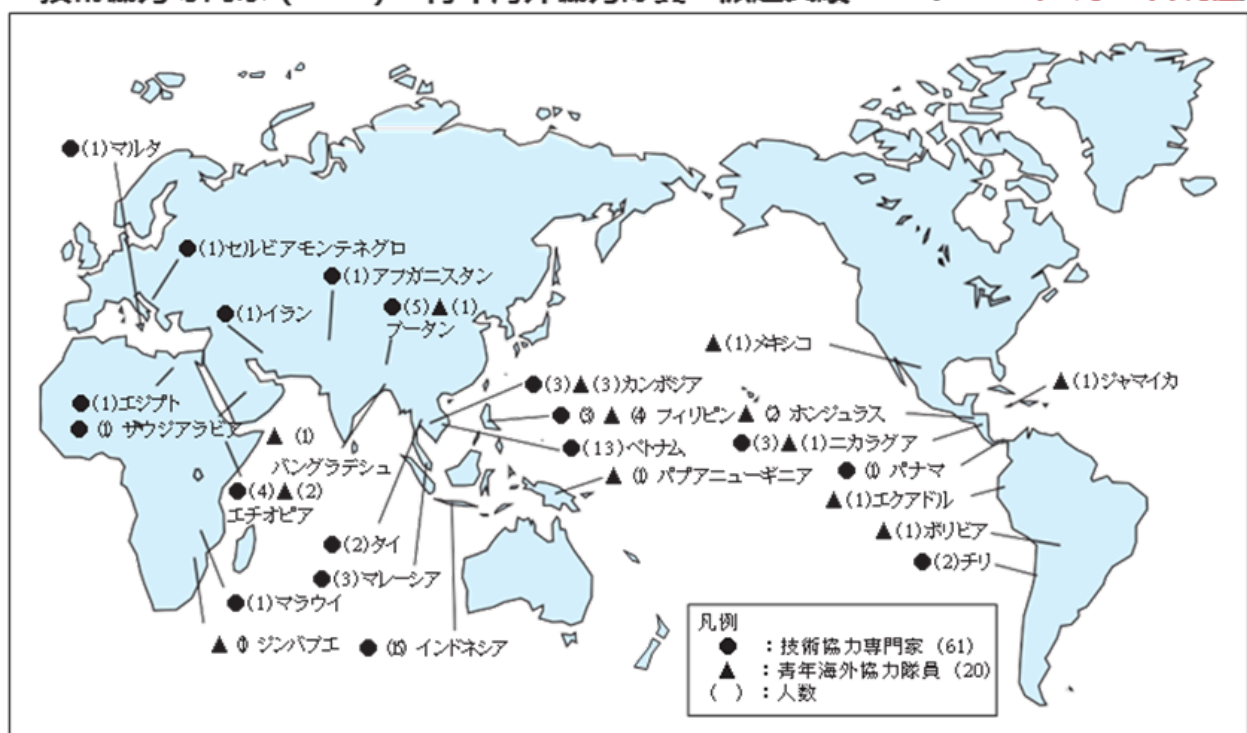
1. はじめに

NTT 東日本 国際室では、NTT 1 社時代から過去 50 年以上にわたる国際協力の実績で培われた、海外キャリアや政府機関等との信頼関係に基づくパートナーリングを維持してきており、これをベースに社内各組織やグループ企業との連携のもと、ビジネス形成や国際交流に取り組んでいます。

具体的には、1 社時代から引継いだベトナム国とインドネシア国での共同事業プロジェクトを通じて培った事業経験や人脈、さらに NTT グループのノウハウと経験を生かし、両国を主としたブロードバンド化・ICT サービス推進ビジネスの形成に取り組んでいます。

また、国際協力活動として、政府機関等（総務省、JICA、APT）からの要請に基づき、研修受入れや専門家派遣に加え、日本の ODA 資金を活用した海外プロジェクトの形成支援や、技術交流・視察のサポートを実施しています。

< 技術協力専門家 (JICA) ・青年海外協力隊員の派遣実績 > (2017年6月30日現在)



2. ベトナムでの活動

ベトナムでは、NTT ベトナム社が、ベトナム電気通信グループ（VNPT）との事業協力契約に基づき、1997年から2012年までハノイ市北部での加入電話約24万回線の建設および事業運営指導を実施しました。



これを契機とし、現在も両社は良好な協力関係を維持しており、ICTを活用した新たな共同ビジネス実現に向けた検討を進め、2016年1月にはNTT ベトナム社とVNPTグループであるVMG社との間で合弁会社OCG(左写真、左から2番目が筆者)を設立し、ブロードバンドユーザー向けゲームコンテンツの卸事業を開始しました。

2017年には子供向け教育コンテンツのVOD配信実施、2019年からモバイル決済システムの導入開始予定など、順調に事業拡大と利用ユーザ獲得を進めています。

また、NTT 東日本が日本国内市場において提供するサービスや、それに付随するコンテンツ、運用ノウハウ等、NTT 東日本の強みを活かした新規事業形成への取り組みを継続しています。

南部ビンズオン省では、電気通信事業会社（VNPT）との相互協力に基づく新興開発エリアICTビジネス形成を推進しています。

また、ハノイ市におけるVNPT・NTT ベトナム・NTT 東日本の3社間の協定に基づく学校向け教育ICTビジネス形成など、今後も引き続きベトナム国内でのICTをキーワードとした更なる付加価値サービスの展開に取り組みます。

3. インドネシアでの活動

インドネシア国は、第6次電気通信開発5カ年計画（REPELITA-VI：1994年4月～1999年3月）により、全国500万回線の電話回線増設計画を策定しました。これは全国を7地域に分け、そのうち5地域について、外資を含む民間資本を活用して電話網拡充を進めていくものでした。各地域においては、インドネシア国営電気通信会社（PTテレコム）と民間資本により設立された合弁会社が、KSO（共同事業運営、BOT）方式によりプロジェクトを進めました。このうちNTT 東日本では、スマラン市（首都ジャカルタ市から東へ約400km）を中心とする中部ジャワ地域の電話基本網増設事業のため、1995年に豪州テルストラ社、現地インドサット社等との合弁会社MGTI社を設立しました。MGTI社は、PTテレコムと共同事業運営のための契約を締結し、約35万回線の電話網設備建設をすると共に当該エリアにおける電話設備の運営および保守を実施しました。

2004年のプロジェクト完了後も、PTテレコムからの視察受け入れ、同社幹部・社員の研修実施、光アクセスネットワークの設備構築や運用・保守に関わる技術交流会の開催など、NTT 東日本とPTテレコムは良好な関係を築いてきました。2010年には、両社の協力関係の更なる発展を目指して、光アクセスネットワークの構築保守及びサービス展開に関して協力する旨の覚書を締結し、活動を継続してきました。

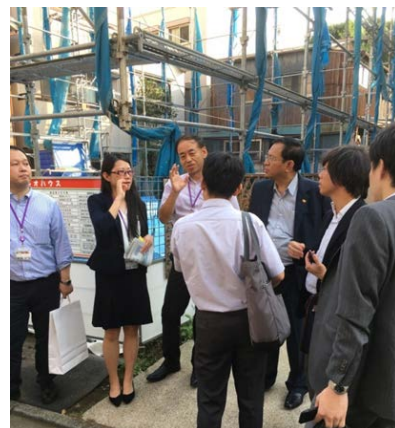
2014年、インドネシア政府はインドネシアブロードバンド計画（Rencana Pitalebar Indonesia）を公布しました。本計画は、2019年までに都市部の家庭の約7割に20Mbps以上の固定ブロードバンド網を提供することを目標としています。FTTH展開が急務となったPTテレコムからの要請を受け、2016年にPTテレコムのFTTH開通工事の生産性向上、品質向上を目的として、開通工事コンサルティングを実施しました。日本の工

法、工具を取り入れた工法解説書を作成し現場作業員へ技術指導を実施するとともに、開通工事に関するビジネスプロセスの改善提案も行いました。今後も、さまざまな分野で連携し、インドネシアの光化推進に貢献していきます。

4. 国際協力活動・視察受け入れ

ベトナムでのサイバーセキュリティ対策向上における APT 共同研究や総務省補助金事業を活用した実証実験の実施、JTEC（(財)海外通信・放送コンサルティング協会）へ継続的に人材を出向させることにより、ミャンマー円借款事業等への国際協力に貢献しています。

また、フィリピン通信技術大臣やミャンマーの郵便電気通信局長が来日(右写真、中央が筆者)し、とう道や機械室内の光設備、共架柱等を見学されました。



5. 技術交流

NTT グループの技術力向上や、技術の海外展開を目的として、海外通信キャリア等との技術交流を実施しています。具体的な交流例としては、台湾の通信キャリアと NTT グループ会社（NTT 持株会社、NTT 東西会社）の技術者にてサイバーセキュリティに関する技術交流やアクセス分野に関する技術交流を実施しています。最新技術や既存技術についての情報交換やディスカッション、双方の設備視察等を実施することにより、互いの技術力向上のための知見を深めています。また、2017年10月のつくばフォーラムには技術交流の一貫として台湾通信キャリアが来訪し、NTT 東日本や関連会社の最新技術について情報収集してきました。

6. 今後の活動

NTT 東日本に承継されたベトナムとインドネシアでの共同事業経験と長い歳月を経て築きあげてきたパートナーシップを活かし、NTT グループのみならず日本の通信関連会社の海外事業展開支援も実施し、事業推進に努め、会社の利益貢献に向け活動を継続します。

ご承知の通り、もの凄い勢いでグローバル化が進展しており、中でも、ICT(IOT, AI)分野はその勢いが止まりません。各社が世界各地で様々なビジネス展開をしていますが、その一方で、「日本とは異なる劣悪な環境下で業務遂行できる健康体を維持できる」、「文化・習慣が異なる環境下で柔軟な対応ができる」、「現地語等の学びの精神を持ち合わせている」などの人材が求められています。国際協力もビジネスも全ては“人なり”だと思います。ビジネスの素地となるこれらを次世代の若者へ「経験する場を提供すること」も、同時に国際室の役目の一つではないかと考えます。

以上

<事務局注>ご寄稿への感想、意見、感動などございましたら、下記サイトのコメントボタンよりご記入いただければ幸いです。

<https://ictov.jimdo.com/home/特別寄稿/>

特別寄稿

当会特別顧問の石井様から、「呆け防止のためにブログを開始した」との連絡があり、ご本人のご了解を得て、いくつかの日記を下記のとおり転載いたします。他にも多数のご投稿がありますので、ご関心のある方はブログをご覧いただければ幸いです。

<https://blog.goo.ne.jp/iwatukiishiikoh>

徒然日記

当会特別顧問 石井 孝

「ソフトウェアは生命線－利用者が内製し管理せよ」2018-08-26
06:23:47 | 日記



現在、国民総背番号制が採用されています。このシステムは極めて重要であることは言うまでもありませんが、一旦誕生すると、際限なく膨張し永遠に生き続ける代物です。このようなシステムの開発とその維持管理の問題について、愚見を披瀝させていただきます。

ソフトウェアと云うモノはいったん開発を終え、そのソフトウェアを使い始めると、次々に機能追加や修正作業が発生します。この作業を続けていくと便利になる一方で、ソフトウェアはいつの間にか増殖し、気がつくとソフトウェアがすべてを支配してしまい、それなしでは仕事ができない状態になってしまいます。従って、秩序ある成長ができるように管理することが肝要です。最初の開発は手始めに過ぎず、使い出してからが本番なのです。

ソフトウェアは社会の仕組みや企業のビジネスの至る所に入り込み、増殖しています。残念なことに、年金問題や証券取引所の不具合に象徴されるように、品質と信頼性の問題が表に出てきてしまいました。しかも、これは氷山の一角に過ぎません。多くの企業は、自社のビジネスを支配しているソフトウェアの開発や維持管理の仕事を外部に丸投げしており、自力で管理する力がありません。

この問題を解決するには、ソフトウェアを利用する組織や企業が内製できる力をつけるしかありません。その力を持ってこそ、たとえ開発を委託したとしても、外部企業の仕事ぶりを見極められるのです。

しかし、ソフトウェアを恐れることはありません。ソフトウェアは100%人間の手で作る生産物ですから、それにまつわるすべての問題は人知の及ぶ範囲内にあります。

ここで最初に提起した国民総背番号制システムに戻りますが、こういったミッション・クリティカルなシステムの開発と維持管理を従来の官業システムのような政府機関から民間への発注形態を継承することで事足りるでしょうか。

政府直営のソフトウェア開発と維持管理を行う機関（もしくは国営企業）を興すことも考えられなくは無いです。医大が附属病院を運営するような形で、国立大学が、官業のソフトウェアシステムの開発と維持管理を実行する附属機関を持つように出来ないものでしょうか。

システム運営の安全性と信頼性が担保されるばかりでなく、実務教育の充実に役立ち、大学経営の強化にも繋がると思います。

「職場環境」 2018-08-28 07:13:37 | 日記

三十数年前、ひよんな事からソフトウェアの世界に迷い込み、当時、この世界では最先端を走っていた IBM のポケプシーにある汎用 OS の開発現場を訪ねる機会を持った。駆け出しの「ど素人」にとっては、見るもの、聴くもの全てが驚きであったが、特に、其処かしこでマグカップを片手に口角泡を飛ばして活発な議論を交わしているエンジニアの人達を眼にし、ソフト開発の一つの鍵を観た想いであった。

「ソフトウェアは人が創るモノ」と信ずる者にとって、組織風土を含めた広い意味での職場環境がとても大事なのではないかと思う。

隣りの人との間でも、メールでやり取りをすると云った昨今、開発チーム全体のモチベーションを、如何に維持・向上させるか、この辺りに一つの大きなキーがあるのではと思うのだが。

「縁の下の力持ち」 2018-09-01 06:47:48 | 日記

嘗てしっかりした大企業では、有名大学を出た俗にいうエリート達が上層部を占め、地方大学、私大、高専等と云った所謂二流（非エリート）の中の猛者連中が、文句も言わず、寧ろ誇りを持って会社を実地で支える「縁の下の力持ち」の役割を果たして来た。

昨今の状況をみると、実力主義の下、誰でも実績を残せば昇進の道がひらけるようになって来ているようで真に結構な事と思うが、一方に於いて、表には出ず地道に裏方で支える「縁の下の力持ち」が極めて手薄になって来てしまっているような気がしてならない。

「縁の下の力持ち」がしっかりした企業では、トップがお飾りのような状態でも何とかもって居た、盤石な土台の下で自立作用が働いていたのである。所が、「縁の下の力持ち」が居ない土台が脆弱な場合は、頭（トップ）がしっかりしなくてはならない。旗振りだけでなく、場合によっては自ら泥の中に手を突っ込む覚悟と度量が必要である。これからの時代、特に求められているのはトップの資質ではないのか。

「叱る」 2018-09-04 06:14:21 | 日記

女子体操の「パワハラ」問題で、ふと思い出したのは、嘗て上司であり師匠であった真藤社長の教え「相手に愛情を感じたときに叱れ」である。

『部下を指導する時、方法論を考えてはだめである。自分自身に思想、哲学を持っていること以外に方法はない。絶対に方法論を勉強してはだめである。人を指導するという事は、相手に愛情を感じたときにすべきである。』

甘い言葉だけでは指導はできない。叱らなければならない場合も多々ある。しかし、相手に愛情を感じたときに叱り、相手に憎しみを感じているときには、叱ってはならないと思う』

人間は感情の動物である。相手の感情を高感度でキャッチできる受信機を備えている。真藤さんが指摘されるような人格を備えて居れば、その師匠から幾ら厳しく接せられても納得し、反省して、憎むなどと云う事は決して無い、寧ろリスペクトの念を強くする。

「新会社」 2018-09-06 05:10:50 | 日記

嘗ての NTT は、設備産業とでも言える業態（通信産業）であった。設備がサービスを産み、それによって収入を得る。この為、合理的な設備投資と入念な設備の維持管理が企業の生命線であった。

近年、サービスの多様化・高度化が急務となり、ハードウェア主体の設備だけでは如何にもならなくなり、これにソフトウェアをどの様に絡ませるかが重要なテーマとなった。そして、サービス自体も単に通信だけでなく、広義の情報通信（IT）サービスに止揚する必要に迫られている。

ソフトウェアから出発した GAF A の様な企業は、IT サービスの機先を制し我が世の春を謳歌している。これに対し、ハードウェアから IT サービスに臨んだ企業は、通信会社のみならず伝統を誇る各社共今一つ精彩を欠いている。

今般、新会社を立ち上げるようであるが、既存各社がよりアクティブな事業活動が出来るよう、新しい会社が触媒の様な能動的活動を行って欲しいものである。自主的ソフトウェア開発の実行など、兎に角、他人任せでなく地に足を付けた地道な、NTT の底力となる活動を行って欲しいものである。

「電気通信と共に三代の記」 2018-09-13 06:44:51 | 日記

表記は、電々公社から NTT に向け、電気通信の中の伝送技術の分野に於いて技術開発に携わり、縦横無尽の活躍をされた「栗山正雄氏」が専門誌「電気通信」に寄稿されたものである。

表題にもある通り、栗山さんは、氏の祖父に当たられる四郎様、父の国雄様、そしてご本人と、逋信省、電々、NTT と三代に亘って日本の電気通信を司る主幹組織でご活躍になられたという畏怖すべきご家系をお持ちである。

お三方の専門は、逋信、無線、デジタル伝送と異なるものの、夫々は当時の最先端技術で、お三方の為された技術開発の成果が今日の IT 技術の礎となって居る。就中、栗山さんのおやりになった「デジタル」「光ファイバ」「高速デジタル伝送」の各技術は現代 IT 技術の根幹をなすものである。

今回、栗山さんより表記ご寄稿文の別刷りを恵贈頂いた機会に感想の一端を投稿させて頂いた。

「鉄腕 岩瀬投手」 2018-09-14 07:14:58 | 日記

昨夜も 8 回に投げ、三者凡退、松坂投手の勝利に貢献した。

些か旧い話になるが、中日ドラゴンズの岩瀬投手は、9 4 9 試合のプロ野球最多登板記録に並ぶメモリアル登板を白星で飾った。数年間、不調のどん底に落ち囲み、引退さえ決意した男が成し遂げた快挙であった。

彼は、社会人野球の NTT 東海からプロ入りした選手である。東海地区で仕事をした経験を持つ NTT の一 OB として、感慨一入である。

NTT では、ノンプロの野球選手として活躍した人達も、選手寿命が尽きると職場に戻って通常の仕事に復帰する。所が、長い間、仕事と疎遠になっていたのも、同世代の人達に比べると仕事が捗々しく無い。しかし、持前のスポーツマンシップで決してへこたれない。兎に角、一生懸命である。こんな同僚に随分と助けられたものである。

<事務局注>ご寄稿への感想、意見、感動などございましたら、下記サイトのコメントボタンよりご記入いただければ幸いです。

<https://ictov.jimdo.com/home/特別寄稿/>

JICA ボランティア事業の制度変更及び 2018 年度秋募集

事務局

JICA ボランティア事業はより公平性・透明性の高い事業を目指し制度の抜本的見直しを行い、2018 年度秋募集合格者から新制度に基づき派遣されることになりました。

2018 年度秋募集の募集期間は 11 月 1 日(木)正午までです。当会会員が応募しやすい案件を抜粋しましたので、奮ってチャレンジしていただければ幸いです。また、JICA 主催の説明会が通年で全国各地及び Web で多数開催されていますので、参加されることをお勧めいたします。

<http://www.jocv-info.jica.go.jp/sv/index.php?m=BList>

<https://www.jica.go.jp/volunteer/seminar/>

1. 総称・呼称変更

JICA ボランティアは総称を「JICA 海外協力隊」と改め、従来の年齢区分に加えて、専門性による区分によって呼称が分けられます。

- ▶ 青年海外協力隊：一般案件（幅広い技能・経験で応募可能な案件）で派遣される方（46 歳以上の方は海外協力隊）
- ▶ シニア海外協力隊：シニア案件（一定以上の経験・技能が求められる案件）で派遣される方
- ▶ 日系社会青年海外協力隊／日系社会海外協力隊／日系社会シニア海外協力隊：上記区分で中南米の日系社会に派遣される方

※一般案件は職種応募、シニア案件は案件応募で募集が行われます。

例：

20 歳から 39 歳の方：青年海外協力隊／日系社会青年海外協力隊として派遣されます。

40 歳から 69 歳の方：

① 「一般案件」に応募する 40 歳から 45 歳の方は、青年海外協力隊／日系社会青年海外協力隊として派遣されます。

② 「一般案件」に応募する 46 歳以上の方は海外協力隊／日系社会海外協力隊として派遣されます。

③ 40 歳以上で「シニア案件」(Type-B)に応募する方は、シニア海外協力隊／日系社会シニア海外協力隊として派遣されます。

2. 待遇

上記変更に伴って、従来は年齢で待遇が異なっていた制度を改め、基本的に全てのボランティアに同一の待遇が適用されます。

① 現地生活費：ボランティアの趣旨に基づき、受け入れ国の住民と同等程度の生活を営むに足る金額。

② 住居費：受入国政府が適切な住居を提供できない場合に上限額の範囲内で支給。

③ 往復渡航費：受け入れ国と日本との往復にかかる赴任時の旅費。

④ 国内手当：本邦支出手当（月額 55,000 円）

※シニア海外協力隊(Type-B)として派遣される方には、上記に加えて**経験者手当が支給**されます。

※任期を満了した方には協力活動完了金が支給されます。

※家族随伴制度廃止に伴い、家族手当は支給されません。

3. 現職参加

所属先に身分を残したまま参加する現職参加者については、人件費補てん制度を廃止されました。他方、雇用を継続される所属先への支援策として、現職参加促進費を導入されます。同費用は、所属先と JICA で覚書を締結して双方の責任等を明確にすることを前提に、訓練期間及び派遣期間を対象として所属先が雇用を継続するために必要な社会保険費等の一部を充当する額として、所属先に定額で支払われます。

4. 2018 年度秋募集(区分欄に記載がない案件は青年海外協力隊のみ対象)

区分		国名・配属先	要 請 内 容
コンピュータ 技術	B	マレーシア 日本マレーシア技 術学院(JMTI)	Industry4.0 に対応できる人材の育成のために、現行シラバスの改訂への提案、同シラバスに基づいた授業実施に向けインストラクターへの指導を行うとともに、現地企業のニーズを探るため連携強化に向けた活動をします。
同上	B	マレーシア 産業訓練校(ILP) スランダール校	職業訓練校のソフトウェア開発コースにおいて、現在行われている訓練内容の見直し、講師に対し技術的指導を行うほか、訓練生の実習先、就職先開拓、産業のニーズ把握のため、主に日系企業との関係構築強化に向けた活動が期待されています。
同上	B	タイ 泰日工業大学情報 技術学部	2018年に新規開設された Data Science and Analytics コースへ助言やビッグデータの解析、データ分析等を担当する教員や学生等への協力案件です。
同上	A	ブータン 総務局 情報通信 技術課	ブータン保健省の保健医療情報システムに地図情報をリンクさせて、より効果的な医療サービスの提供ができるよう、システムの構築、保守管理を支援します。
同上	A	マーシャル マーシャル諸島電 気公社	同国内のエネルギー全般を扱う公社の IT 課に所属し、現在稼働している 2 種類の料金徴収システムや人事管理システムが収まっているサーバーシステムを統合し、業務効率の促進化を図るとともに、公社内の IT システムに対して新規導入等の助言を行います。
同上	A	ドミニカ共和国 サントドミンゴ工 科大学	首都にある工科大学のソフトウェア工学の技術コーディネーターとして、同大学工学部が新設を計画しているソフトウェア工学の修士課程の開設を支援します。開設後は改善提案を行いません。
同上	A	ジャマイカ セント・ジョセフ 教員大学	首都キングストンにある 1984 年設立の教員養成大学にて、約 80 台の PC、サーバ、ネットワークの維持管理等について、システム・アドミニストレータの業務効率化と学生へのサービス改善を目的にシステム環境整備を支援します。
同上		上記以外、43 件	詳細はホームページをご覧ください。
電気通信	B	マレーシア 高等技術トレーニ ングセンター (ADTEC)クリム校	職業訓練校の電気通信学科において、講師に対し有線電気通信技術および宅内設備、情報通信技術、光 IP ネットワーキングについてのシラバスの作成や、実習室整備、教材作成のための助言を行います。
同上	B	モロッコ マラケッシュ応用 科学大学	総合大学に属する専門大学にて、5G(5 世代移動通信システム)の物理層、MassiveMIMO、mmWaves などの新技術について、修士および博士課程の学生に対し指導します。

電気・電子機器	B	パラグアイ ラウル・マリア・ ベニテス・ペルド モ国立技術学校・ 職業訓練センター	地方都市にある技術学校の電気科において、同僚教師に対し電気コースの基礎分野(「電気基礎」、「電気機器」、「電気実習」など)を中心に、実習を通し体系的に説明するための指導を行います。また、中学校卒業者を対象に講義や実習を行います。
同上		ガーナ タマレ技術大学	地方都市にある技術大学において、高校卒業者を対象に電気・電子の講義と実習を中心とした授業を同僚と共に担当します。また、電子回路など新教材の作成や同僚講師の知識・技術向上のための指導も行います。
電気・電子設備		ホンジュラス レンピーラ県教育 事務所	ホンジュラス西部の技術中高校において、高等部の電気科の教員と生徒に対して授業を中心に技術的支援を行います。また、教員の知識、技術のアップデートを目的とした研修会を計画、実施します。
同上		タンザニア 職業訓練公団 ミ クミ職業訓練セン ター	モロゴロ州ミクミ国立公園に隣接した職業訓練校にて、学生及び同僚教員に電気工学の知識と技術、及びこれらに関する技術指導を行います。また、運営に関するアドバイスも行います。
再生可能・省エネルギー	B	ネパール 国立科学技術院	国立科学技術院所有のソーラー設備の維持管理、及びデータ分析、技術指導を行うとともに、院内研究者や関係者に対して、太陽光発電に関する研究指導及び助言をします。
同上		コスタリカ 国立職業訓練セン ター電気科	国立職業訓練センター電気科では、太陽光発電や風力発電の仕組みを理解し、太陽光パネルや風力タービン、管理設備の設置や管理方法などに関する授業と実技指導を行います。
同上		ドミニカ共和国 イサ大学	国内第2の都市にある農業専門大学にて、再生可能エネルギー研究室のチーム力の向上、研究カリキュラムの見直し、再生可能エネルギープロジェクトへの提案と開発などへのサポートします。設立間もない研究室であり、同僚とともに作り上げていきます。
経営管理	B	タイ 泰日工業大学経営 学部	大学の経営学部にて2018年に新規開設されたサプライチェーン&ロジスティクスコース運営やコース内容に対して、日本での実務経験に基づいて支援し、同コースの充実を図る活動です。
同上		エルサルバドル 経済経営大学 (ESEN)	ビジネススクール大学において、5Sなど「Kaizen」の概念を含めた経営管理論など経営に関する科目を担当し講義を行います。また、学生が実習として企業などで行う問題解決プロジェクトのアドバイザーとして、指導・助言を行います。
品質管理・生産性向上	B	コスタリカ コスタリカ工科大学 顕微鏡研究室	工科大学の顕微鏡研究室においてISO9001もしくはISO17025の取得にかかる支援を行います。
電子工学	B	ケニア マルチメディア大 学	ナイロビ郊外に位置する工学系高等教育機関において、光ファイバー通信とその関連する分野に関し、既存講義の改善と講義の実施、新規講義の提案を行います。また、修士課程の学生に対し研究の進め方・論文作成などについて助言を行います。
マーケティング		18件	詳細はホームページをご覧ください。
PCインストラクター		42件	詳細はホームページをご覧ください。

海外実践マネジメント

今も継続・拡大するフィリピンの Smart・PLDT プロジェクト(8)

— 『NTT を巡るグローバル環境の変化』 日米貿易摩擦、AT&T 分割・再編、
そして NTT のグローバル化へ —

元 PLDT チーフオペレーティングアドバイザー
元 NTT アメリカ社長
現 株式会社ハイホー CEO
鈴木 武人

顧客の囲い込み策 長距離料金の廃止

次なる Smart の課題は顧客の囲い込みでした。多くの国と同様に、移動通信網と固定網、移動通信網間にはキャリア間の跨ぎ料金が課されていました。同一地域に複数の固定通信事業者が混在する例は余り無いかもしれませんが、月額が固定料金で規制されている（あるいは市内通信は無料、即ち電話を借りて通話しても市内通話であれば無料）固定網の同一料金域内(市内通信)では、キャリアが違って当然の事に跨ぎ料金がありません。しかしながら、跨ぎ料金が無いので、既存通信会社からすればトラヒックがあっても収入にならない事から、網間チャネルをなかなか設けてくれないという問題が有りました。網間チャネルを設けない事が既存の通信業者にとっては新規業者の参入排除の手段となりました。日本大使館や日系企業等が折角、率先して Smart の固定網に加入してくれたのですが、ユーザ(PLDT 等の既存通信会社の顧客)から電話が掛かり難くなったとのクレームが発生しました。規制当局に駆込んで対策をお願いしたものの、この問題の根本的解決には顧客ベースの拡大、即ち携帯事業の拡大が必要で、長い時間と戦術を要しました。

以下、携帯の話に戻ります。フィリピンは島国で、地方と都市は物的・経済的な交易だけではなく、出稼ぎでも結ばれており、長距離料金は魅力的な収入源でした。しかしながら、地方へ大ゾーンで展開していた Smart の課金上の問題として、基地局のゾーンの間を移動する移動通信電話の発信地と着信地で長距離料金課金を精繳に行うことは難しかったのです。長距離料金廃止の背景にはこの問題がありました。夏の首都として避暑地で著名なバギオ市を一挙にカバーしようと山頂に設置した基地局の電波が 200Km も離れたマニラで受信してしまったこともあり、この場合、基地局(バギオ)が端末の所在地(マニラ)となって、そのままではバギオの基地局を掴んだマニラの端末がバギオからの長距離料金を課金されるという不公正になってしまうのです。といっても、国際ローミングの様に、登録地をベースにすることも人の動きが激しい事から現実的ではありません。種々ブレインストーミングの結果、全く別の観点の結論となりました。即ち、携帯のエアタイム、即ち通話料金は課金するものの、Smart 網内であれば長距離料金を廃止する事としたのです。これによる効果は、地方への展開を積極的に行って、既に加入者を得て居た事と合わせ、このような地方との通信をする都会の加入者にとっても大変に魅力的なものとなりました。即ち、長距離料金無しは同一通信会社である必要から、Smart に鞍替えするようになって、相乗効果となって加入者を増やすのに絶大な効果をあげました。

GSM 導入と送金サービス

しかしながら世界的に流行した、アナログの単純で弱い認証機能を利用したクローニングによる収益悪化(利用していない国際通信料金を請求された等のクレームに対する返金、さらに信頼性の崩壊によるチャーン)と、競争会社の GSM の自社網内無料 SMS の開始により加入者を失うダブルパンチの状況が Smart を襲い始めました。クローニング対策は種々ありましたが、アナログのままでは世界的に抜本的解決策が無く、GSM への移行が選択肢となりました。

GSM の導入の為に検討を進めましたが、既に 900MHz 帯には空きは無く、1.8GHz にせざるを得ませんでした。しかしながら、種々実験を重ねた結果、1.8GHz では建物の影や中に電波が届かず、カバレッジを得るには膨大な数の基地局を設置する必要が判明しました。

したがって、NOKIA が先行開発していた 900MHz/1.8GHz のデュアルバンド端末にかける事としました。デュアルバンド端末の提供に合わせて、同社による GSM ネットワークの展開を実施し、一部端末の無料提供も行って現行加入者の 900MHz 帯アナログから一時的な GSM 1.8G 帯への地域毎の引越し、この完了を待って 900MHz 帯アナログの GSM への切替え、仕上がりはデュアルバンド GSM の提供という綱渡りを実施しました。市内の立体地図を作り、緻密なカバレッジのシミュレーションを行う等 NOKIA の全面的な協力で成し遂げられたのです。フィンランド人の緻密で謙虚な進め方に大いに感謝した次第です。



GSM で可能となった SIM カードのセキュリティを利用し、プリペイド通信料金(エアertime)を送受する機能を設けました。この事で、従来印刷したカードを委託販売していた流通コストの削減が出来ただけでなく、自然発生的に換金性が生じ、実質的に網経由で金銭を送受する事が可能となりました。安価で手軽な国内・国際送金サービスが実現された事になります。

これは、例えば香港に出稼ぎに行っている人が、予めフィリピンで、或いは香港の売店、あるいは知人からもエアertimeを相対で購入出来る様になったということです。そのプロセスは携帯の画面で確認でき、今度は必要の都度、その家族等にエアertime額を送る指示(画面)をすると、ネットワーク上でフィリピン側の夫々の SIM のアカウント、即ち電話番号にエアertimeが付されるのです。プリペイドカードを店舗で購入し、端末でプリペイドカードの番号を登録して、そのカードの料金額を登録すると基本的に同じですが、ある意味流通革命でした。

この先は当面 Smart の関与する事ではありませんが、受け取った額をフィリピンのコンビニの様な売店で若干の手数料でこれを売る、即ち自然発生的に現金化が出来る様になったのです。更にそのコンビニ店が Smart からの卸売りの他に、こうして購入したエアertimeを正価で販売するという非常に安価な流通機構になりました。

次のステップは銀行口座との連動です。まず、Smart の番号を銀行口座に登録する事で、これからエアータイムをチャージし、更に転送する事ができるようになりました。

その次として、これには当初は銀行側の抵抗が強かったのですが、中銀総裁の Buenaventura 氏のサポートを得て、最初は Smart が大手銀行のサービスの媒体として開始、その後、銀行間の競争から幾つかの銀行の態度が緩んで Smart のサービスとして契約が出来、Smart の端末があたかも ATM の様に銀行口座を操作出来る様になりました。

このサービスは docomo にも紹介させて頂きましたが、金融界との問題か当時は検討して頂けませんでした。しかしながら、First Pacific の子会社が網アプリのベンダーと協力してアジアの一部やアフリカへ紹介し、普及が図られました。いずれにしても開発途上国では高価な端末は個人が所有せずに共用して、殆ど無料で入手出来る個人の SIM カードを持つ使い方が流行りました。伝統的な競争他社がポストペイドや ARPU にこだわる中、Smart 社はプリペイドと SIM カードの容量拡大やアプリの導入で加入者を増やし、同一網での囲い込み戦略も成功して、同国最大の移動通信会社となって順調な経営状況となりました。

docomo も 3G、FOMA で SIM カードを導入しましたが、顧客の移動(チェーン)を恐れたためか、故障の原因になるとかで封印したりしてその利用を図りませんでした。実際には SIM カードは電源と無線部は端末を利用しますが機能的には独立した PC のようなもので、大きいものでは 2GB 程度のメモリ容量を持ち、プログラム機能と電話帳に加えて地図、ゲーム等種々のデータを格納できます。SIM カードに情報を格納しておけば、SIM カードを挿すだけで自分の端末として使えるのです。Smart はこの活用に励み、次々と新しい機能とサービスの提供に努めました。

当初自網内のみに限られ、相互接続が拒否されていた SMS も Smart の加入者が増えるにつれ網間接続が実現、結果として当時データ通信利用をプロモートしていた GSM Congress(現在の MWC)で、『世界で始めてデータ収入が音声収入を上回ったキャリア』として表彰される等の榮譽を受けました。当時フィリピンは NOKIA 王国と言われ、日本以外では世界的に NOKIA 端末が普及し、今の日本の iPhone のようにブランド化していました。

この頃、docomo から何度か i-Mode の展開を打診されました。しかしながら、i-Mode は i-Mode 専用の端末を必要とし、フィリピン(海外)で対応できる機種が 1 機種だけだったので、マーケティングが難しいと考えていました。



GSM の当初は回線交換でたったの 9.6kbps でしたが、その後パケットデータ通信 GPRS に移行して最大 171.2kbps、更に 8PSK の EDGE を導入して最大スループット 473.6kbps へと改善し、当初は日本のお家芸であったカメラ機能と共に、表示画面も大型化していきました。NOKIA は 2000 年には既に Symbian OS によるシャープの ZAURS

同様(PDA)のプログラム機能にインターネットアクセスと音声通信機能を持ったスマート端末 Nokia 9210 Communicator を出していました。ただ Android のようにプログラム機能を開放したものでなく、また NOKIA 自体がその顧客であるキャリアに気を使い過ぎた為かも知れませんが、NOKIA がアプリ市場を形成しませんでした。結果的にそのアプリが事務処理に限られ、ゲームや面白ソフトのような分野に多様化する事が無く、これ等が可能な Apple の iPhone に淘汰されてしまったと考えられます。他にも色々な要素が有るのですが、これ等のホンのちょっとした経営判断が大きく世界を変えたものと実感します。ただ、NOKIA は現在でも世界で冠たるネットワーク機器のベンダーとして 5G をリードしています。

3G では最大 14.4Mbps、LTE(4G)では最大 140Mbps と無線が固定回線による ADSL を凌駕するようになって、現在の 4G スマホはすっかり PC と競争するようになって来ました。(次号に続く)

<事務局注>ご寄稿への感想、意見、感動などございましたら、下記サイトのコメントボタンよりご記入いただければ幸いです。

<https://ictov.jimdo.com/home/海外実践マネジメント/>

真藤さんのことなど

日本ベンチャーネット社長 エッセイスト 田上 智



アフリカ・ガーナ滞在中、一時帰国の際、30分ほど真藤さんと雑談したことがあった。私は、すっかりアフリカナイズされてしまって、約束の8時半はおろか、9時過ぎに社長室に入った。当時の秘書役の田島さんは、かなり慌てていて、「田上君、いったい何をしていたんだ、早く社長室に入れよ」と声を荒げていた。

入るなり、真藤さんは遅れたことは何も咎めず、「生活はどうなんだ。何を食べているのか？タピオカなんかはみんな食べているのか？年間の降雨量はどうかね？」。そのうち、児島副社長を呼んで「何か仕事で困ったことがあったら副社長に言ってくれ」ということで、雑

談は終わった。こちらは、電話料金収納率が低いことや、労使交渉が厳しいことなどを言うつもりだったが、そういうことには一切触れられなかった。

日本通信協力の役員の人から、「経験談をまとめて出版したら」と勧められ、NTT出版に赴き、生まれて初めて出版してみようかという気になった。ちょうどタイ出張で、出先のホテルで時間の隙間を利用して骨の部分ほぼ書き終えていたが、帰国してさらに書き足したのだが、書いても書いても出版するにはページ数が足りない。細かいことは、編集の西山君や飯田さんに助けてもらったが、大筋のことは、当時の出版部長で、東洋経済新報社のやはり出版部長をしていた赤木邦夫さんからアドバイスを受けた。

ようやく200ページを超える見通しがたった頃、赤木さんから「田上さん、現地女性との恋愛のことなどを書き足したら、さらに2割がた販売数が増えるのだけど、何か無いですか？」。言われる意味は納得だけど、残念だがその希望には添えなかった。マラリアにも罹患し、ようやくの事で帰国した身、給料の遅れやボーナスの未支給など死にたいと何度思ったことか？恋愛のゆとりなどは皆無であった。

凱旋パーティーを日本通信協力が開いてくれたが、マラリア後遺症で、何せまっすぐ立ってられない。テーブルの端につかまって倒れるのを阻止していた。本の出来上がりに合わせ、NTT出版が日経新聞にも広告を出してくれたおかげで、順調に販売は伸びた。幸いなことに、NTTの新入社員の教科書にも指定され、中央学園の新社員は「国際希望」がずいぶんいたようだ。ただ、その頃は今と異なり、国内重視の経営方針で、2年間で教科書指定は終わったという。ただ、全国学校図書館推薦図書になり、今でも公立図書館では所蔵しているところが多い。

真藤さんはちょうどそのころ事件に巻き込まれ、不遇な時代にあったが、前述の赤木さんが「真藤さんにも、持って行くよ」と言って1冊届けたようだ。突然、真藤さんから葉書でコメントが来た。「大変な思いをしたようだね。・・・自分もブラジルに造船所を造る時、同じようなカルチャーショックを受けた・・・」(了)

<事務局注>ご寄稿への感想、意見、感動などございましたら、下記サイトのコメントボタンよりご記入いただければ幸いです。

<https://ictov.jimdo.com/home/海外グラフィティ/>

世界観の広がりとは

日本ベンチャーネット社長 エッセイスト 田上 智

立花 隆の「宇宙からの帰還」を改めて読んだ。初めて読んだのは、若いころ仕事で海外に出る前の事だったので、感動する部分が今とは違った。かなり、有名な部分と同じ感情を持ったのだ「・・・地球を離れて、初めて丸ごとの地球を一つの球体として見たとき、・・・はじめはその美しさ、生命感に目を奪われていたが、やがて、その弱々しさ、もろさを感じるようになる。感動する。宇宙の暗黒の中の小さな青い宝石。それが地球だ」。

宇宙空間で感じた「はかない物体」という表現が、体験者でないとわからない感情ではないだろうか？知識では計り知れないこの体験というもの、人々がお互いをコミュニケーションできる共通の基盤が、あるいはこの「体験」というものではないか？だれもが、地球を「はかない物体」などと思ったことはおそくないだろう。宇宙から地球をみるという誠に稀有な経験者のみが持ちうる特権だろう。

この稀有な特権をもった宇宙飛行士の「その後」を記述したのが「宇宙からの帰還」だが、実にさまざまである。あるものは伝道者に、あるいは政治家やビジネスに身を投じたものなどだ。

なかでも共感を持つのはジョン・スワイガートだが、宇宙体験というものに対するコメントは次のようなものだ。「一つは、ものの見方、考え方が変わったということだ。人間の物の見方というのは、すべて経験の産物だ。小さな経験しかない人間は考え方も狭い。例えば、あなたが小さな子供の時、あなたの全宇宙は家の中だけだ。しかし、やがて家の外に出て近所を歩き回るようになれば、それだけ世界は広がり、世界の見方が広がる。もっと大きくなって隣の町まで出るようになれば、さらに広がる。隣の州、隣の国までいっていけば、もっと広がる。世界の広がりが見る見方を広げる。我々宇宙飛行士は、地球の外から地球を見るという経験を持った。これはその体験をした人間の物の見方を変えずにはおかない経験だ。・・・」

スリランカ滞在中、モルジブに2度遊んだ。ウォーターコテージというサンゴ礁の海に建てられた家の台所の戸を開けると、階段でそのまま海に入れる。そこで感じたことは、小さなサンゴ礁には小さな魚類しか棲まないし、大きくなれば魚のサイズもそれに従ったということだ。近頃「外国には行きたくない」という若者が増えてきたらしい。何とも情けない現象だ。日本という国の力が衰えているのではないか？

学生時代、アルバイトで金をためて、船とシベリア鉄道でヨーロッパに行った友達もいた。それほど外国へのあこがれが強かった。西村賢太の「苦役列車」を読むと、アルバイトで自分と同じ零下30度の品川の冷凍工場で働く場面が出てくるが、そこでも20万円の金をためてヨーロッパに行っていた大学生もいた。外国に行くということは、今と違って大変なことだったが、それなりに「世界観の広がり」があり、その後の社会人生活に影響を与えたのではないか？以前は「平家、海軍、国際派」という言葉あり、企業でも国際派は非主流であるかのような印象を与えていたものだが、今や日本企業もグローバルな展開をしないと生き残れないご時世である。個人の人生をもってしても、「外国に行くということは、たとえ観光でも『世界観の広がり』を期待でき、より豊かさをもたらすもの」ではないだろうか？（完）

<事務局注>ご寄稿への感想、意見、感動などございましたら、下記サイトのコメントボタンよりご記入いただければ幸いです。

<https://ictov.jimdo.com/home/海外グラフィティ/>

スペイン・モロッコ俳句紀行(3)

元 JICA シニアボランティア

現千葉県 JICA シニアボランティアの会
北垣 勝之

観光の有無で分かれる地方都市 シャウエンや色の演出町おこし

モロッコ北西部、やや内陸に入ったティトゥアンに宿をとる。セウタから6人乗りグラタンタクシーで40分、旧市街の王宮近くまで乗り入れてチップ込みの二人で6€とは安いものだ。以前は1時間位かかった距離、だが今は丘を縫うように立派な道路ができて運ちゃんはぶっ飛ばす。車の通行量も少ない。ティトゥアンの宿探しが大変だ。王宮の近くとは聞いていたが、門前の衛士に尋ねても分からない。辺りは人混みの雑踏、路上商人の出店で足の踏み場もないくらい。その中で靴を並べて売っている若手の商人に尋ねる。「ああ、伝統的なリヤドのホテルだね」と言い、店は別の仲間に委ねて自ら先導、道案内してくれる。王宮の前の狭い路地に入る。人が二人並んだらすれ違うのも儘ならないほどだ。2,3分歩いたところで「その先の角を左に曲がったら入口だよ」と言うや、そそくさと来た道に戻って行く。私も辛うじて一言礼を言う。チップも全く必要のない爽やかな人物だった。此処は現地人の生活が主体で、観光客に依存する町ではないようだ。スペインの影響が強く、白壁の家がびっしり詰まる街区である。

一方、その翌日の宿は山間部のシャウエン。ここは「青い街」のキャッチフレーズに誘われて観光客が大勢訪れる。バスターミナルからプチタクシーで坂道をカスバの先まで行く。タクシーで乗り入れできるのもここまで、あとは迷路のような隘路を自力で上がって行かなければならない。道案内人がどこからともなく現れる。胡散臭い若い男だが、土地勘のない悲しさ、彼の案内に付いて行くしかない。やっとの思いでリヤドのホテルに着くが、そこで当然のようにチップを要求される。5DH渡そうとすると少ないと言う。10DH出すと、さっき見せた5DHコインも寄こせと来た。「この野郎」と怒鳴りたくなるのを抑えて後は知らん振り。これが観光の町の実態である。



レンガ積む^{そや}粗家もハイカラ青化粧

シャウエンにプチタクシーまで色合わせ
山間地火力は弱しガスボンベ

お伽噺にも出て来そうな山間の町シャウエン、本来白壁の家々だったはずだが、いつ頃から青い家々が変わったのであろうか。近くに聳える2,000m級の山には冠雪が見られる。最近の寒波襲来で降った雪だと言う。雪山を背景に見晴らし台から眺める青い街並みが美しい。でも特別な都市計画もなかった村落が、世界中から観光客を呼ぶまでに豹変するとは、それもそう遠い昔の話ではない。家屋や塀だけではなくタクシーまで青い。

見事な演出である。ところが交通不便な山間地、エネルギー源はトラックで運ばれてくる小さなガスボンベだけ。安ホテルのシャワーは熱くならず当地での入浴はパスする。モロッコでは電力と道路、上下水道などのインフラはかなり改善されてきたが、ガス燃料は今一つ。そもそも資源はリン鉱石くらいで原油は産出されないお国柄、カサブランカ、サフィ等の大西洋岸工業地域に比べると北部山間地の都市開発は遅れていると思われる。一方、アルジェリアに隣接し亜鉛の産地でもある工業都市ウジダや、セウタと同じスペイン領港湾都市メリリヤにも近く鉄と石炭の集積地ナドールなど東部諸都市とも遠く離れている。地勢による因果である。

メディナ内迷路訪ねて宿遠し 古都フェズや懐古に頑固旧街区



古都フェズの宿は正しく旧市街フェズ・エル・バリの最奥部に位置している。無事たどり着けるか日本出発前から懸念していた。メディナの入口ブー・ジュールド門には新市街からタクシーで乗り付けたが、さて此処からが大変。3年3か月前に訪れた時は、迷路内の幹線とも言うべき2本の小路を歩いただけ。グーグルマップで見る限り幹線北路を辿り、最奥部からやや戻る方がよかろうと勝手に決めてトライする。ホテルまでは最短でも500~600mはあるはずだ。そろそろ近くなった

と思しき辺りで何人か地元民に尋ねながら進む。だがホテルの名すら通じない。一軒の店の親父に訊くと、「ちょっとややこしい場所なので、息子を道案内に立ててやろう」と言う。彼は最短距離を行くと告げて足早に歩きだす。右を向いても左を見ても薄暗い土塀の家々ばかり、目印になるものはなく皆目見当がつかない。不安の中を5,6分小走りに歩いてようやく「ここですよ」と指で示す。城壁のような壁に鉄と木でできた黒い重厚な扉が一つあるだけ。輪金具の呼び鈴を敲くと扉が開き、中から当主が顔を出した。道案内の青年にチップを渡して礼を言い館の中に入る。彼の手引きがなければ、探すのに1時間以上も彷徨することになりそうな場所である。ここに2泊、何回か出入りしたが、その都度道に迷い試行錯誤しながら館に戻る。うまく行ったのは最後8回目、宿をチェックアウトした時、ようやくスムーズに幹線南路に出る。世評に違わず世界の迷路の街である。

当主の説明によると、400年の歴史あるモロッコ人法律家の邸宅が廃館になり、放置されていたのを8年前に改装したリヤド(宿泊施設)だという。イスラム建築の重厚な造りは当時の権勢を偲ぶに余りある。噴水のある中庭、それを取り巻く三階建ての館内に18室、パティオに面した部屋は天井が高く、黒い梁に白い漆喰、壁にはタイルが敷き詰められ、天井からはタペストリーとカーテンの装飾、大理石の床、手の込んだ照明器具や家具、広いバスルーム等々。更にこの館にはプールもあり、暖炉のあるダイニングルームの脇から狭い階段を上って屋上に出れば、モスク風の塔屋がそそり立つ。ここからフェズ旧市街のびっしり詰まった薨の波と、北にマリーン朝の丘陵墓地を眺めることができる。内部は私好みのシンプル仕様、テレビもない部屋に大きな空調装置が一つ、暖を取るため夜通し点けっぱなしにしておいた。何となれば部屋の大きな扉は隙間だらけ。それでも数百あるフェズのミナレットのアザーンが一斉にしゃべり出しても、堅牢な館の中に埋もれた私の部屋まで音声は届かない。例外は夜半の驟雨が数滴漏れてきたくらいである。

丘の上墓地に貧富の諸相あり

宿の屋上から眺めたマリーン朝の墓地に上ってみたくなり、迷路を北に進みキッサ門から旧市街を抜け出る。13世紀にフェズを拠点に繁栄を築いたベルベル人のマリーン朝、彼等の子孫が営々と繋ぐ墓地を横切り頂上を目指す。墓標の大小に世代の浮沈を読み取ることができる。気の利いた文言を石碑に刻み先祖を称える墓もあれば、無縁仏の如く荒廃した場所もある。ときの所業を映すは洋の東西を問わず墓地とて皆同じ。丘の頂上からはフェズの街が一望できる。迷路の中をうごめく人間は見えないが、その数800ともいわれるモスクの尖塔が至る所に直立、イスラム王国の古都鳥瞰はまさに壮観、はるばる来ぬる旅に満足感を覚える。



万華鏡遺産に覗くイスラム美

フェズ・エル・バリの入口にあるブー・ジュールド門をはじめ、ネジャーリン広場の泉、フェズ創設者の墓サヴィア・ムーレイ・イドリス廟、カラウィーン・モスクなど、迷路内にあるマリーン朝名残の建築物や遺構には、構造様式、彫刻やタイル等にイスラム文化の精華を見る思いがする。きめ細かい模様、デザイン、配色は他の異文化にはない独自の美しさを持つ。まるで万華鏡を覗くようなワクワク感が起こる。ベルベル族のその昔から育まれてきたマグレブ文化(チュニジア・アルジェリア・モロッコなどアフリカ北西部地域)の成果である。

街路樹の蜜柑下から刈り取られ

地中海沿岸の都市には街路にミカンの樹を植えているところが多い。今回訪れたマラガや、シャウエン、フェズ、マラケシュ、アガディール等のモロッコの諸都市では、街の至る所でたわわに実るミカンの樹を見かけた。スペインではバレンシア・オレンジ、モロッコではやや小粒のマンダリン種が多い。それらの実は人の手が届かない高さに生る。やはり美味しい実は早々に摘み取られてしまうようだ。食べてよし見てよし、大らかな風情である。(次号に続く)

<事務局注>ご寄稿への感想、意見、感動などございましたら、下記サイトのコメントボタンよりご記入いただければ幸いです。

<https://ictov.jimdo.com/home/海外便り/>

第 37 回海外情報談話会模様

事務局

第 37 回海外情報談話会が 2018 年 9 月 7 日 (金)15 時～17 時、(一財)海外通信・放送コンサルティング協力(JTEC)及び Web TV 会議室において開催された。講師は石原 直様(東京大学名誉教授、元 NTT 物性科学基礎研究所長、元 NTT 技術企画部長)、演題は「工学系高度人材育成の動向と海外との比較」であった。学術論文に見る研究力の低下、基礎研究者の減少と基礎研究費の低下により日本の基礎研究が危ない状況にあること、高度工学系人材としての博士人材の育成環境及び産業界での活躍の場が国際的に劣っていること、科学技術立国の復活に向けた施策など、幅広くかつ熱く話され、質疑応答も活発であった。



以下にいくつかの話題を列挙する。

- ・一般社団法人八大学工学系連合会は、北海道大学、東北大学、東京大学、東京工業大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、九州大学で構成され、工学にかかる教育、学術研究及び社会貢献の推進などを行っている。現在、八大学工学系連合会の事務局長を務めている。
- ・2004 年の国立大学法人化以降、国際的な論文掲載数が諸外国に比べて劣り始めた。特に、工学系の低下が顕著である。
- ・基盤的資金(政府支出)が減少しているため、外部資金拡大に努めているが、米国、欧州の公的機関の研究開発費は伸びているのに対して、日本は停滞したままである。公的研究資金と論文数は正の相関関係にあるというデータがある。
- ・政府提供資金は公的機関 52%、大学 39%に支出されているが、支出目的の相違等から論文数は大学 80%(国公立 60%)、独立行政法人 10%となっている。
- ・研究者数と論文数も正の相関関係があるというデータがある。
- ・任期付教員数が特に若手で増加しており、任期中の研究活動が短期指向になり、任期後の退任が多くなっている。
- ・研究時間が減少し、社会サービスが増加している。
- ・米国の研究室は研究員、大学院生を多数抱えており、若手による論文数が多い。
- ・日本の博士号取得者数は OECD 加盟 34 カ国中、25 位(先進国ではほぼ最下位)である。理工系博士号取得者数は一般的に経済規模(GDP)を反映しているが、日本は伸びていない。オランダは国家として博士育成を推進し、2000 年～2012 年に博士論文数を 80%増加させた。
- ・八大学の工学系学部・修士課程から博士課程への進学率は 1 割程度である。
- ・米国では、産業界で博士人材が高く評価され、平均年収も 10 年後以降、格段に差を広げるが、日本では博士人材の主要企業への技術系採用数 2.9%、博士人材への優遇措置のない企業 73.4%となっている。
- ・文科省は、博士人材育成のための教育プログラムとして 21 世紀 COE、グローバル COE を実施してきており、現在も博士課程教育リーディングプログラムに取り組んでいる。

- ・欧米の大学院は博士学位授与審査に外部委員を含めているが、日本の大学院では学内委員のみである。
- ・欧州は学費が安く、学費が高い国でも奨学金が充実している。米国の大学院生は給付型奨学金、リサーチアシスタント等により返済義務のない生活費相当分の支援を受けている。米国の大学院では学費全額免除者 57.3%(一部免除者 79.0%)であるが、日本は 1.7%(一部免除者 34.9%)である。
- ・八大学工学系連合会として、科学技術を基盤に産業を牽引する博士人材育成のため、①優秀な学生の博士課程進学を促進、②魅力あるリーダー育成プログラムの設計と実行、③産学共同研究の推進、④博士インターンシップの拡充、⑤学生への経済的支援の充実、⑥博士課程学生に明るいキャリアパスを確保、について提言した。



質疑応答として、論文内容(言語)、研究以外の作業、任期付教授(特に若手)、兼業、文科省の対応、メンター育成、インターン、グローバル人材育成、次世代リーダー育成、諸外国との人事交流、昔の NTT 通信研究所の良さなど、多数の参加者から活発に提起され、真に“談話”会らしい双方向の刺激的なものとなった。

<事務局注> 講演資料は、講師のご厚意により、下記サイトからダウンロードすることができます。 <https://ictov.jimdo.com/home/海外情報談話会/>

編集後記(編集長から一言)

皆様のご協力をいただき、おかげさまで会報第 83 号を発行することができました。今回は新たに NTT 東日本国際室の活動や徒然日記のご寄稿などもあり、誠にありがとうございました。

私事、仙台に住んで居りますので地元での行動を述べさせていただきます。私は JICA 東北 JOCA の「宮城県の SV、JOCV を育てる会」に SV 先輩として 7 年前から参加しています。宮城県は東日本大震災の復旧途上にあります。JOCV、SV 経験者が地元大学等と協力し復旧作業の促進に貢献していることで宮城県から高く評価していただき、うれしく思っています。

今後とも当会へのご指導・ご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

発行： ICT 海外ボランティア会(ICTOV)

会報担当： 村上 勝臣(編集長兼広報部長)、山川 博久(事務局長)

ホームページ担当： 山崎 義行(報道部長)、安達 信男(幹事)